
人は性格によらない

こぐち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人は性格によらない

【Nコード】

N8500Z

【作者名】

こぐち

【あらすじ】

ここはとある高等学校。まあ、偏差値はそこそこ高い進学校だ。その生徒である橋本哀史は、なにかとつかつかってくる校長がとてつもなく苦手だった。そんな哀史はある日、校長の意外な姿を見してしまう。

俺は今、猛烈に怒っている。

クソッ、なんであんなやつが権力にぎってんだよ！

絶対におかしいだろ！

何故俺がこんなになっているかと言うと、それは朝の集会までさかのぼる

がやがやとうるさい体育館。

今日は月に一度の集会の日だ。

めんどくさい、俺の感想はこんなのだが、周りの奴らはそうは思っていない。何故だ？

眠た眼をこすりぐちぐち言いながらもとりあえず列に並ぶ。

俺は一応比較的模範生なのだ。

朝七時半には必ず学校に行き、授業中は寝ないで真面目にノートを取る。少ししか問題を起こすこともしない。

もちろん無遅刻無欠席の皆勤でもある。

そんな模範生な俺だが、どうしてもこの集会だけは苦手だ。

「おはよう、諸君。今日も元気に学生しているかね？」

はつきり言おう。俺はこの校長が嫌いだ。

あの女性であるにもかかわらず男性のような話方をして、正確には知らないが結構な年齢のはずなのに二十台前半のような容姿をし

ている校長が嫌いだ。

理由は多々ある。

上げるとしたらきりがないがあえて一つ上げてみよう。

まず、なにかとつかかってくることに。

早く来て教室で寝てると、わざわざ声をかけて俺の睡眠を妨害しやがる。朝の時間は貴重だつてのにさ。

しかもよく俺のクラスに視察に来る。

それだけなら別にかまわないけど、俺が一番後ろの席だからって、ずっと俺のノートを覗き込んでくんだったの。

「我が校は文武両道をかかっているが、みんなよく頑張っている。先日行われた模試では……………」

無駄に長い話め。

あんたの声が俺の集中力をガリガリ削ってきやがる。

ボイコットしてえ。マジだりい。

「……………だった。えー、これで終わりにする」

「よっしゃ！ やっと終わった」

「……………あー、橋本^{はしもと}哀史^{あいし}。集会終了後に校長室にくるように」

やっちまった。

あまりにも嬉しかったからつい声に出してしまった。

あまりクスクス笑わないでください。

あと、「いいなあ」って言っている人が多数いるが、変わって欲しかったら変わってやるぞ。

「やっと来たか。随分時間がかかったものだな？」

できる限りねばったが、教師達にうるさく言われてしょうがなくきてやったんだ。

感謝はされど、文句を言われる筋合いはないぞ。

「なにか御用ですか？」

「なに、そう急ぐな。次の授業までは十分に時間がある。そこにかけるといい」

できれば今すぐにでも帰りたいんだが。

あんたと同じ空気を吸ってるだけでウザいのが伝わってきてたまったものじゃない。

そのニヤケ面やめろ。

「お茶とお菓子も出すよ」

おいおい、一人の生徒にそんな贔屓しちゃっていいのか？
これは問題だぞ。

まあ貰えるものは貰う主義の俺は当然のように貰うけど。
仕方ないから座ってやろう。

ようかんと緑茶が出された。
和菓子、いいよね。

「それじゃ話に入ろうか」

「うつす」

「口に物を入れながら話すのは行儀が悪いぞ」

「すみません。」

今の口に入ってるから心の中で謝っておけばいいか。

「それにしても、君も素直じゃないな」

なにが？

そう思ってもまだ口に物が入ってるので話せません。

俺が話さないからなのか、なかなか続きを言ってこない。
もどかしい。

「君は私に会いたいが為に、毎度毎度あんな態度を取っているのだから？」

「ブフウ ツー！」

なに言っただやがるこのクソ女郎。

そんな訳あったたまるかっただ。なんでわざわざウザい奴に会いに来なきゃいけないんだ。

「そうならそうと言ってくれれば、私としてはきちんと時間を作ってやるのに……」

「……むぐむぐ、ごっくん。変なこと言ってんじゃねえよ。できればあんたとは一生関わりたくなかったね！」

「なるほど。私に会わなければこんなにも恋焦がれることがなかった

た、そうゆうことか。大丈夫だ、私ならすぐにでも君を満足させられるぞ?」

「意味わかんねえこと言ってるじゃねえ!! 帰るっ!」

「あつ、待ちたまえ。ここでは嫌だったのなら、今夜うちに来ないかい?」

あー、あー。

後ろでなんか言ってるが俺には聞こえないなー。
とりあえず教室戻って授業の用意しよ。

こうして冒頭に戻る。

まったくもって気持ち悪い。

ホントあいつの思考回路は理解できないわ。
なにたくらんでかわからない、あの狸ババアは絶対信用なんてしないぞ。

「おーっす、橋本。今日はなに言われたんだ?」

「別に。お前には関係ないだろ」

「連れないこと言うなってえ。校長先生様とのお話を聞かせておくれよー」

いかにも軽そうな話方をするこの男は長谷川^{はせがわ}海人^{かいと}という。
いっつも髪は寝癖をつけている眼鏡野郎だ。ちなみに活字中毒者。

今も辞書くらい分厚い本を携帯している変人。
そんなくせに俺よりも身長が約三十センチも高いときた。死ねばいいのに。

「それにしても哀史つてばよくあんなことできるよねー。入学一ヶ月でもう先生達から問題児認識されてるよ」

こいつは野田恵果^{のだ けいか}。

髪を肩まで伸ばしており、いわゆるセミロングの髪型をしている。こいつも俺より身長が高い。ふざけんなと思う。

「そんなわけあるか。俺は真面目に授業受けてるし、無遅刻無欠席。その上問題もちよつとしか起こしてないぞ」

「はい、ダウト。授業中によく落書きしてて校長先生に注意されてんじゃん」

「違う！ あれはたまたま気まぐれで描いてたらあいつが来たんだ！ いつもは真面目だ」

「またダウトだ。校長先生様が来る度、いい加減学習しろってくらい毎回注意されてるぞ」

「それに問題起こしてるのだって絶対ちよつとじゃなわよ。数も数えられないのね」

「少なくとも五十件は起こしてるよな」

途中から罵倒まで混じってきてるぞ。

俺が黙っちゃってもお構いなしに俺のこと非難しまくってるし。

「お前ら、そんなに俺をいじめて楽しいか？」

一度聞いておかなきゃいけないと思った。
なんとなく、なんとなくだがこいつらからサディストの匂いがした。

気のせいだってことを願う。

「もちろん」

「たりめーだろ」

……もうダメだ。

俺はもうしばらく立ち直れない。

こうなったら机に突っ伏して不貞寝してやる。

のそのそと自席へと歩いて倒れるように座った。

ああ……太陽の光が気持ちいい。やっぱ窓際って最高だね。

そしてそのまま眠りにつく。

はずだったけど教師が来て起こされてしまった。

まあ、俺は真面目に授業を受けるつもりだったから丁度よかったけどね！

今日の授業が全て終了した。

海人と恵果に挨拶をして、斜光が赤く輝いている中俺は帰路に付いた。

さて、今日のバーゲンはとくに終わってしまったな。そこまで

金に困ってるわけじゃないから別にいいけど。

帰ったらなにしよう。

とりあえず予習と復習だろ。終わるのだいたい九時くらいになるからそこから飯食って、風呂入って……。

あとは趣味に没頭するか。

今日は2時くらいまでやるとしよう。

「うう……重っ……」

おや？ 随分かわいい少女がいるではないか。

そんなこと言っても後ろ姿だから真相はまだわかんないけどね。

でもあの茶髪ぐあい、俺の勘からいってあの少女は絶対にかわいい。。

その少女はなにやら重そうな荷物を持っているし、これは男として見逃せないぜ。

「お嬢さん、お困りのようですね」

「きゃあ　　っ！~~~~~~~~っ！！！」

む、後ろから声をかけてみたが、ちょっとマズったかも。

「まさか、驚いて飛び上がり持っていた荷物を落としたあげく落ちた場所が自分の足のつま先で痛さに悶える、なんてことが起こるなんて思わなかったぞ」

「う~~~~、いたいよう。いたいよう！！　うー！　うー！」

「よしよし。お兄さんが悪かったから泣き止んで。お願い」

こんなご近所さんの目があるところでこの状況。絶対勘違いされる。

現にあそこにいるおばさん達がこつちをチラチラ見ながらなんか小声で話してるし。

それにしても「うー」なんて泣き方、変わってるね。

……いつこつちに泣き止まない。それどころか泣き声が大きくなっている気がする。

しゃーねえ、こんな時は最終奥義に頼るとするか。

「ほら、お嬢ちゃん。お兄ちゃんアメちゃんを持ってるんだけど、欲しい？」

「うー！ うー！ うう？ あ……………欲しい」

萌えるっ！ てか萌えてるっ！

涙目で首をかしげたり、アメちゃんに気づいて手を伸ばそうとする仕草がマジかわいい！

俺もうロリコンでいいや。

「はいどうぞ」

「ありがとう。…………ほむほむ、おいひい！」

「。そうそれはよかった」

この子、俺を殺しにきてやがる。

今はかろうじて耐えてるが、油断すると鼻血による出血多量で死

ぬ。

くっ、うちの校長がこんぐらいかわいければ毎日がお花畑の日々になるのにつ！

なんであんな狸ババアなんだああ！！！！

つつてもこんな容姿の大人なんてどこにもいねえか。いたらそれはそれで問題だ。

「ほむほむ。あ、そういえばおにいひゃん。わたしに用事があったんれひよ？」

「……………はっ！ そそ、そうだよ。随分重そうな荷物だから、代わりに持ってあげようか？」

「ほんひよっ！？ れも、これすんごいおほいよ」

「お兄さんにおまかせ！！！！！！」

アメちゃんが口の中のスペースをほとんど使ってるからだろう、実に素晴らしい舌たらず語で話してくれてる。

地球に生まれてよかった
！！！！！！

俺は当初の予定通り少女の荷物を運ぶことが決定した。

俺の前をぴよこぴよこと歩き、先導する少女がとてもかあいいで
す。

「あのねあのね、それでね……………」

「へー、そうなのか」

「うん！ そうなんだよ！」

先程から他愛もない話をしている。その楽しげな様子がハンパなくかわいい。

しつこいと言われようが、俺はなんでも言っぞ！

「この子かわいい！」

どうだ、まいったか。

「ねね、ね、ねねねねえ！！」

「ん？ どうした？」

「うちが見えたからここまでいい！ ありがとう！！」

少女はそう言う俺が運んでいた荷物をひったくるようにして取った。

やはり少女にとっては結構重いようでかなりふらついている。支えてやろうとしたが、ふらついた状態でどんどん走って行ってしまい、あの子のだらう家に入ってしまった。

しばらく俺は呆然としたね。

三十分は突っ立ってたんじゃないかと思う。

だって、あの少女の家、めちゃくちゃでかい豪邸だったんだもの。

だが、そこまでだったら五分くらいで我に返っていただろう。問題はその後に見たものだったんだ。

どこからともなく現れたうちの学校の校長、通称狸ババア、もあの豪邸に入って行ったんだ。
さも当然のようにさ。

俺の目の前は真っ暗になった……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8500z/>

人は性格によらない

2011年12月26日21時50分発行